事業名：「ことばの教育」パイロット校事業

学校名：尾道市立上川辺小学校

所在地：尾道市御調町本７３７－２

ＨＰ：http://www.onomichi.ed.jp/kami

学校規模：６学級　６３名

1 研究の概要

(1)研究テーマ及び研究のねらい

①研究テーマ

論理的に考え適切に伝え合う力の育成

― 書くことを中核とし「読む力」を高めるために―

②研究のねらい

伝え合う力を育成するために，国語科の授業の中で昨年度から身に付けた「言語技術」を効果的に生かし，論理的思考力を育てていく。また，「言語技術」の習得により「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の言語能力を確実に伸ばし，子ども一人一人が，自己の言語生活を切り開き，自己を変容していくことができる力の育成を目指す。

(2)研究組織・体制（省略）

(3)研究内容

①「読解力」向上を目指す指導体制の工夫・改善

説明的文章を中心にした授業の工夫・改善

・文脈把握力や要約力など「読む」ための学習技能の明確化と効果的活用

「読む」ための学習技能を身に付けさせるための学習方略の開発

・単元のねらいに合わせた学習技能を身に付けさせるための工夫，テキストの開発

②ロジカルコミュニケーション力の育成

伝え合いの場の設定

・計画的なことばのトレーニングの実施

国語科と「言語技術」と他教科との関連

・算数科での効果的活用（練りあいの場における，発言のしかたのモデルの活用）

2 授業改善の視点

(1)指導案の中に使いたい「言語技術」を「どの時間に」「どこの場で」「どのように使い」「どのような効果を期待するのか」を明記することにより，つけたい力をより明らかにする。

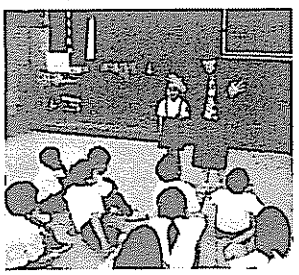
(2)「言語技術」を効果的に使い授業に生かすために，単元のねらいに沿ったテキスト（基本のスキル理解のためのスキル）で取り出し指導をして学習方法を身に付けさせる。

(3)「言語技術」のトレーニング（つくば「言語技術」教育研究所所長　三森ゆりか先生のカリキュラムを参考）の計画的な実施。

週２回のチャレンジタイムでの継続指導

（13:55～14:10）ことばのワークを使用

年間10時間の全校ことばの教室（教科等外）



・討議を通して生きたことばの使い手を育てる。

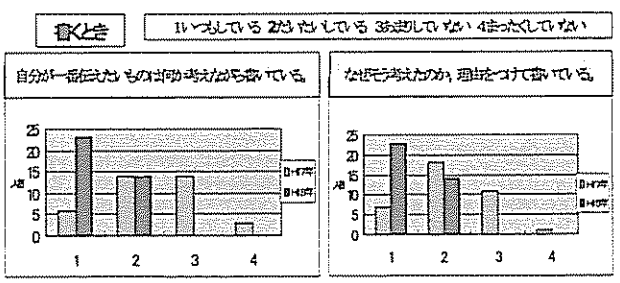
・パイロット教員の全校一斉指導を通して職員研修の場とし，自己の指導に生かす。

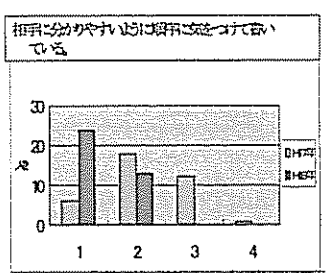
㋒学校生活全ての中で「「言語技術」」を意識して場・目的・相手に応じたことばの使い方を指導する。

㋓「言語技術」を導入した算数科の授業提案をし，論理的思考力の育成を図る。

3 研究の成果と課題

＜ことばに関する児童アンケートより（抜粋）＞





＜書く＞

・話すときと同様，考えと理由はセットであるという意識が定着してきている。

・話す力とリンクさせて授業の中に「書く活動」を積極的に取り入れてきた結果と考えられる。

＜「基礎・基本」定着状況調査＞

	平成17年度	平成18年度
国語	86.4%	89.6%
算数	91.5%	93.0%

成果

①ことばに関する児童アンケートにおいて，昨年度に比べ，「書く」の領域で大幅に伸びている。児童が「伝えたいこと」「理由」「順序」に気を付けて書くようになった。

②「基礎・基本」定着状況調査において，相手や目的に応じた記述問題の通過率が昨年度と比べ高まった。

③「言語技術」を習得したことにより，分かりやすく伝えるためにはどんな技術を使ったらよいか，工夫や努力をする児童が増えてきた。（授業中・集会・生活全般の場面で）

④考え（意見）と理由はセットであるという形が身に付き，答えだけを求めがちであった学習から，「理由は・・」と根拠を

を考え討論する場面が多くみられるようになってきた。

⑤指導者自身の課題が明らかになり，思考を深める発問の在り方など授業改善につながっている。

(2)課題

ツールである「言語技術」をどこでどのように生かし，ことばの力を付けていくか研究を深める。

(3)今後の改善方法等

教科の特性を踏まえた「言語技術」の効果的な生かし方の具体的な資料つくりと授業のねらいに迫る授業研究を進める。

4　実践事例

(1)第4学年　国語科

(2)単元名　くらしの中の和と洋(東書　4年下)

①単元の目標

「和」と「洋」の対比に注意して文章の要点を読み取ることができる。

(3)授業の工夫

「くらしの中の和と洋」をセルフディベートの手法を使って読み解こう

受け答えの技術（問答ゲーム）
本校レベル7　賛成ですか・反対ですか

(4)指導について

和と洋のちがいをその「よさ」に注目しながら比較・対比させながらで読ませていく。そのための方法として，ディベート形式を取り入れた。

指導の手順の柱は次の3点とした。

①構成を考える

既習学習での技術を用いることで本文をかたまりとしてとらえ，全体を俯瞰させる。

1　はじめ(序論)・なか(本論)・おわり(結論)の3つに分ける　※結論は未提示とする

2　なか(本論)を分ける

序論 ― 本論1 ┌ 本論2 ┐ (結論)
　　 └ 本論3 ┘

＜取り入れる言語技術＞

受け答えの技術　構成を考える技術

既習学習の基本型をもとに型を見抜き，内容を構造的に読ませる。

②論理を考える

文章を3つのかたまりとしてとらえさせることができたら(結論の段落がないことに気づいたら)，比較・対比の視点でディベート風に整理しながら読ませる。

1　思考の組み立て方が分かる表現を参考にする

・対比の観点　　AとBのちがいは～

・思考の仕方　　このちがいが～

・対比して述べる　Aは～である。一方Bは～

・秩序立てて　　まずAは～　次にBは～

2　本論2　本論3　の情報をセルフディベートで整理する。

(例)和室でたたみに座ると2つメリットがある。

1つ目は …　　2つ目は …

一方洋室は

＜取り入れる「言語技術」＞

情報を正しく伝える技術　様々な角度から物事を見る技術

比較・対比の思考を助けることばを的確に見つけさせる。

③批判的に読む

論理の展開を吟味することで筆者の書きぶりの工夫を読み取らせる。主体的な学びとしていくために，予想結論を書かせる。

1　論理展開の予想を立てる

2　要旨をまとめる

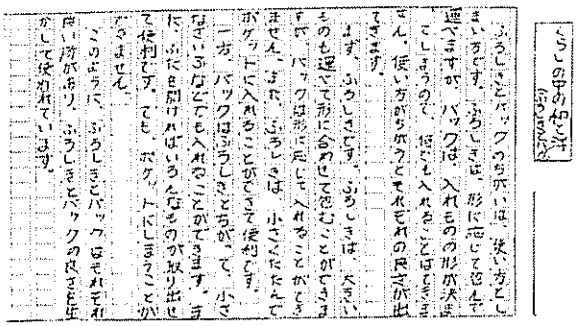
3　自分の考えを持つ

＜取り入れる言語技術＞

構成を考える技術　　要点をまとめる技術

構成を考えることで文脈をとらえ展開を予想させる。

自分の考えを発信する


くらしの中の和と洋

ふろしきとバックのちがいは、使い方としまい方です。ふろしきは、形に応じて包んで運べますが、バックは、入れものの形が決まっていてしまうので、何でも入れることはできません。使い方がちがうとそれぞれの良さが出てきます。

まず、ふろしきです。ふろしきは、大きいものも運べて形に合わせて包むことができます。でも、バックは形に応じて入れることができません。また、ふろしきは、小さくたたんでポケットに入れることができて便利です。

一方、バックはふろしきとちがって、小さなものでも入れることができます。また、ふたを閉めればいろんなものが取り出せて便利です。でも、ポケットにしまうことができません。

このように、ふろしきとバックはそれぞれ良い所があり、ふろしきとバックの良さを生かして使われています。

(5)成果と課題

①成果　教科のねらいに迫るための言語技術を導入することによって，学習方法を具体的につかむことができ，児童自らが課題解決のための思考を深めることができた。

②課題　授業のねらいに迫るための「言語技術」を選択し，目的に合ったトレーニングを継続的に積み重ね授業に生かす。